

125

肺癌切除後長期生存例の臨床的検討

長崎大学第一外科

○大曲武征, 中村 謙, 綾部公懿, 内山貴堯,
川原克信, 中尾 丞, 南 寛行, 三浦敏夫,
辻 泰邦

肺癌の予後を左右する因子については、組織型、進行度、リンパ節転移、手術根治度、補助療法等が検討されている。これ等の問題について教室の切除後5年以上生存した肺癌症例を中心に検討したので報告する。1955年から1979年5月までに教室で切除した肺癌症例は261例である。5年生存率を評価しうる1974年5月以前に切除した症例は153例で、消息不明2例、直死例8例を除いた143例のうち5年以上生存例は34例(23.8%)である。pTNM分類による病期別5年生存率はI期52.1%、II期27.8%、III期4.5%、IV期9.1%とI期に比べII、III、IV期症例は予後不良である。組織別5年生存率は扁平上皮癌24.6%、腺癌27.9%、大細胞癌14.3%で小細胞癌に5年生存例はなかつた。根治度別5年生存率は治療手術42.6%、準治療手術11.5%、非治療手術6.7%である。術式別5年生存率は肺剝例8.6%、肺葉切除例28.7%で、肺剝例の予後は極めて悪い。以上より長期生存が期待できるのはstage Iで、腺癌か扁平上皮癌であり、肺葉切除により治療手術が可能な症例である。

次に5年以上生存例について検討すると、5年経過後死亡した症例は10例で、その死因は再発死6例、他病死3例、不明1例で半数以上が切除5年以後の再発のため死亡している。このことはたとえ5年以上生存しても、再発及び転移が重要な問題であることを示している。再発及び転移をきたしたものは10例(2例は5年以内再発)で、組織型は腺癌6例、扁平上皮癌2例、未分化癌2例でとくに腺癌の3例と未分化癌2例はいずれもstage Iで治療手術がされているにもかかわらず5年経過以後再発をみている。このことから腺癌、未分化癌症例は長期にわたる観察が必要であることを示している。

結 論

- 1) 切除後5年以上経過例143例のうち5年以上生存例は34例で23.8%であつた。
- 2) 長期生存が期待できるのはpTNM分類がI期で扁平上皮癌又は腺癌のうち肺葉切除で治療手術が期待できるものである。
- 3) とくに未分化癌と腺癌は術後長期にわたり嚴重なる経過観察が必要である。

126

肺癌切除後長期生存例の検討

三重大学医学部胸部外科

○磯島明德、鈴木俊郎、湯浅 浩、草川 実、

現時点における我々の肺癌の治療成績は満足すべきものではない。そこで今後の治療成績向上に資すべく我々の施設の長期生存例について検討を加えた。

術後5年以上の経過例は112例であり、組織型別では扁平上皮癌55例、腺癌41例、大細胞癌2例、小細胞癌14例、混合型1例、不明8例である。病期別ではI期25例、2期20例、3期76例であり3期症例が多く取り扱われている。

術後5年以上の長期生存例は16例であり、入院死亡を除く耐術者5年生存率は18.4%である。術後5年以上の長期生存例16例の内訳は年齢は41~70才、性別では男10例、女6例であり、組織型別では扁平上皮癌7例(耐術者5年生存率17.5%)、腺癌6例(17.6%)、大細胞癌1例、小細胞癌1例、混合型1例で、扁平上皮癌および腺癌は未分化癌に比して長期生存例が得やすい。

臨床病期に関しては1期14例、2期はなく、3期2例であり、臨床病期の早い症例で長期生存例が得やすい。手術方法では肺葉切除が多く、そのうち1葉切除10例、2葉切除2例であり1側肺全剝は4例(右肺1例、左肺3例)である。

手術の根治性に関しては16例中14例において治療切除が行われているが2例では非治療切除に終わった症例であり、非治療切除の2例はいずれも扁平上皮癌である。

非治療切除症例中1例は左肺全剝+胸壁切除を施行したが腫瘍組織が胸壁から縦隔にかけて遺残したので術後放射線療法を開始したところ、気管支腫瘍から膿胸を併発したが、術後17年3ヶ月生存した。非治療切除の他の1例は右中下葉切除を施行したが、術後しばらくして気管支断端に癌組織の浸潤が存在した事が明らかとなり術後化学療法を行い6年4ヶ月生存した。

以上から扁平上皮癌に対しては非治療切除に終わった症例でも術後の併用療法を追加することにより長期生存例が得られていることから、積極的に切除療法を行う方針をとりたい。

腺癌、未分化癌においては臨床病期の早い症例では切除療法により長期生存が得られる症例もあるが、化学療法をはじめとする併用療法(今回検討した症例全例が一定の方針治療されていないため)を改善する必要がある。